

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

六 情念(ひきがね)

インヨウ・カオス

「……アオイ」
弱々しいアキホさんの声。

(副題) ウラの心にソエた願い

乙女原 ゆり

六 情念(ひきがね)



ヤツが吹き飛んでいったのを見た僕は、呆然としていた。

「あの紙がこんなに効くなんて……」
すると。

「お前は……誰だ?」

アキホさんが入つていった家のなかから、男の人があなてきて僕にそう言った。

三十代ぐらいのその男の人は一瞬、鋭い目つきで僕を見たが、直ぐにヤツが吹き飛んでいった方向へと走つて行つた。

「アキホ!」

玄関の方から、女性の泣き叫ぶ声が聞こえた。

「アキホ……さん?」

僕は慎重に家の敷地内へと足を踏み入れて、玄関へと近づいた。

「また一緒に遊びたいな……」
アキホさんの姿が、薄くなっていく。
「私の前からまた……いなくならないで」
着物姿の女性は、喉から絞り出すようにして、そういう言つた。

彼女がアオイさん……なのだろうか。
「また……ね」

そう言つて、アキホさんは。
アキホさんは……。

「うう……あつ……」

泣き叫ぶアオイさん。

中で何が起こつたんだ……。

「はつ……はつ……」

急にがくがくと、足が震え始めた。

ヤツが、アキホさんに何かをしたのか?
「僕が……もつと早く……」

もつと早く、アキホさんを見つける事ができれば。

アキホさんが消える事はなかつたのか?
「……くそつ！」

アキホさん……。

僕は動けずにその場に佇んだ。すると

「……！」

急に、家中から、異様な気配を感じた。

「何だ……？」

その気配はとても重たく暗く、へばりつくようにしてその場に漂った。

「まさか、アイツが！」

その暴力的な雰囲気に、一瞬、吹き飛ばしたはずのあの靈が、再び現れたのかと思つた。

が、それは違つた。

「たま……さん？」

泣いていたアオイさんが顔を上げて、誰かにそう言つた。

今になつて氣付いたが、玄関の近くにもう一人誰かがいたようだ。

「アイツは……痛めつけるから」

冷たい声はそう言つて、家中から出てきた。

深く重たい気配の正体は、一人の女の子だった。年は僕に近いように見えた。

「き、君は……」

そう呟いた僕の横を、彼女は無言で通り過ぎた。無視しているというよりは、僕の存在に気付いてすらないようだつた。

「ま、待ってくれ」

いつしまつた彼女を僕は直ぐに追いかけた。だが。

道に出ると、彼女の姿はもう見えなくなつていった。

☆

「……え？」

気付くと私は、一軒家から別の場所にいた。辺りを見ると、一面に短い草がたくさん生えている。

ここは……どこかの公園だろうか？

すると。

「湖君？　どうしてここに！」

私を呼ぶ声が聞こえたので振り返ると、夏美さんがいた。

「夏美さん？」

「っ！　危ない！」

かばうようにして夏美さんは私を押し倒した。すると。

ひゅつ、と乾いた音が、いま私が立つていた所を掠めていった。

「ちっ」

そう言いながら、「アイツ」は空中から数メート

ル先の地面に降り立った。

「大丈夫か？ 湖君」

「あ、ありがとうございます……」

もし夏美さんが助けてくれなかつたら、私の首は

アイツの刀で軽く、刎ねられていたかもしれない。

「何でここに……。いや、それよりも君は今、突然

現れたように感じたが」

険しい顔つきで夏美さんは言つた。

「わ、私もよく分からなくて……」

私はそう答えた。

「食材の方から来てくれるとは、ありがたい」

アイツはこちらを睨みながらそう言つた。

「それにしてもあの、『胡散臭い男』め。女は一人

でいると言つていたが……」

アイツはぶつぶつと呟きながら、腰に巻いたボロ

ボロの布から何かを取り出して、腕に塗り付けた。

よく見ると、アイツの右腕に焦げたような跡があつた。

夏美さんがアイツにつけた傷だろうか？

「……とにかく君は俺の後ろに」

「は、はい」

そう言つて夏美さんはアイツに向かつて駆け出した。

「鬱陶しい！」

そう叫んで、アイツは刀を構えた。

「……」

走りながら何かを唱えた夏美さんは、左手を空に

向けた。

すると。

ドン！ と鼓膜が破れそうな音が鳴り響き、空から雷がアイツ目掛けて走つた。

「ちつ」

当たる寸前で、その雷をアイツは避けた。

だけど、その動きを夏美さんは予測していたようで、足を止めて素早く右手をアイツの足元へ向けると、また何かを唱えた。

「な、なにい……！」

アイツが立つている地面から天に向けて、全てを溶かすような炎が吹き上げた。

「があああ……っ！」

炎をまともに受けて、アイツは苦しんだ声を上げている。

「これで……！」

言いながら、夏美さんは両手をアイツに向かって突き刺した。

「……ああああああああっ！」

アイツは大きな叫び声を上げながら、ザシユつ、と刀で自分の胸を突き刺した。

「な……！」

驚いた表情で夏美さんは、言の葉を唱えるのを止

めた。

「……」

刀を胸に突き刺したままの状態で、アイツは動きを止めている。

夏美さんが、アイツを倒したのだろうか？

「ヤツは何を……？ ……っ！」

何かに気付いて、夏美さんは空を見上げた。

「あっ！」

空を見ると、目の前で動きを止めているアイツと全く同じモノが空へと逃げていた。

まるで分裂したように。

「クソ術使いめ！ もう力が……！」

叫びながら、アイツは逃げて行く。

「くつ……逃がすか」

夏美さんはヤツを追いかけて走り出した。

その時。

ピリッと私の全身に鳥肌が立った。

アイツ、逃げるの？

逃げるなんて……許さない。

「許さない……！」

一瞬、目眩を感じた後に、私は右手のひらをアイツに向けていた。

「逃がさない」

そう、呟いた。
すると。

体が浮かび上がり

「痛みを……」

アイツ目掛けて、私の体は飛び出した。

「……湖……君！」

夏美さんの呼びかける声が下の方から聞こえた。

「はあ……はあ……ん？」

必死になつて逃げているアイツは、近付く私に気が付いた。

「お、お前、人間のくせに飛んで……！」

アイツは驚いたように言つた。

「い、いや、この雰囲気……お前、人間ではないのか？」

「アオイさんは泣いていた」

握りしめた右手をアイツに向けて、私は言つた。

「だから、アンタも泣き叫んで」

「い。」

だけど今は、アイツの言う事なんてどうでもいい。

「アオイさんは泣いていた」

握りしめた右手をアイツに向けて、私は言つた。

「だから、アンタも泣き叫んで」

すると。

「お、お前は何だ……！」

アイツの声が震えている。

「お、お前は何だ……！」

アイツの声が震えている。

「お、お前は何だ……！」

お腹の辺りに力が渦巻くような感覚。

感じるその力は、何となくあまり「良い性質」で

はなさそりだけど……。

「アイツに攻撃できるのなら、何でもいい。」

「来て」

「そう私が言うと、へその上の辺りから服をすり抜けて、外に向けて大量の黒いモヤのようなものが出てきた。」

「黒いモヤは姿の透けた大量の『蠅』だと私は心で理解した。」

「……何と、おぞましい」

「アイツは私を見て、そう呟いた。」

「アンタに言われたくないなあ……それじやあ

……」

「私は言葉に力を込めて、言つた。」

「行つて」

「すると、黒いモヤは勢いよくアイツに向かって襲い掛かっていった。」

「なつ……！」

「アイツは逃げ出そうとしたけど、もう遅い。」

「あ……あああああああ！」

「黒いモヤはヴヴヴと不快な音を立てながらアイツに纏わりついた。」

「ああああ！ 痛い痛い痛い！ 何だコレは

ああああ」

「アイツは悲鳴を上げた。」

「あああああ！ こ、これは呪いの類かあああ！」

くそ、くそ、くそおおお！ 人のくせにこの女あああ！」

すると、アイツは力なく地面に向かつて落ち始めた。」

夏美さんの攻撃や、私の身体の中から出た黒いモヤのせいで力がなくなつたのか。どうでもいいけど。

「痛みはまだ……」

「ううつ……」

「心臓の辺りに急に激しい痛みが走つた。」

「な……に……」

貧血を起こした時のように意識もだんだんと薄れていく。」

「あ……」

「つう、と鼻血が垂れて。」

「……っ」

「私の体は空中から地面に落ち始めた。」

「落ちていく体を『力』で止める事ができない。」

「あー。何かヤバそうだね」

「右耳に誰かの囁く声。」

「ま、初めはこんなものでしょう」

別の誰かが左耳に囁く。

「どうする？」手伝つてあげようか」

「うーん。この子の力なら大丈夫でしょう。干渉しそぎるのは良くないわ」

「そうだね」

その言葉を最後に、二つの声は聞こえなくなつた。

「なん……なの」

ひゅるひゅると、風を切りながら私の体は落ち続ける。

このままだと、地面に叩きつけられて……。

「あ……夏美さんだ……」

落ちる私に、必死に何かを叫ぶ夏美さん。

あと少しで、地面にぶつかる……。

と、思ったその瞬間。

私は意識を失った。



「消えた……」

一瞬にして消えた女の子。

あの人間離れた気配……いや、彼女は本当に人間だったのか？

「……いや、今はそれより……」

この後に僕はどう行動をすれば……。

そう、考えていると

「リョウ君！」

呼びかける声に振り向くと、岩男さんと坐道が駆け寄ってきた。

「何で外に出ているんだ！」

凄い剣幕で岩男さんは僕に問い合わせた。

「す、すみません」

「家から出るなどあれほど……！」

「岩男、叱るのは後にして」

僕と岩男さんの間に入つて坐道は言つた。

「リョウ、何があつたの？」

「……家にいたら突然アキホさんが、『アオイが近

くにいる』と言つて飛び出したんだ。それを追いかけて僕も外に……」

「……とにかく無事で良かった。それでリョウ君、

アキホさんはどこに？」

はあ、とホッとしたのか呆れたのか、溜息を吐いてから岩男さんは僕に訊ねた。

「アキホさんは……もう、消えてしましました……

最後にアオイさんに会つて」

玄関で力なく俯いているアオイさんを見ながら僕は言つた。

「……そうか。あの靈がアオイさん、か」

僕の視線の先を見て、静かに岩男さんは言つた。

「ボクの術はちゃんと発動したようだね……」

呟くようにして、坐道は言った。

「……岩男さんたちは、どうしてここに？」

僕は訊ねた。

「私たちの方もいろいろとあってね。ヤツの気配を追つていたら、それが急に二つに別れたんだ」

「気配が別れた？」

「ああ」

岩男さんは頷いた。

「二つとも全く同じ気配で驚いたがね。とりあえず近くのヤツから当たろうと、それを追いかけてここまで来たんだ」

「そうでしたか」

「リョウ。その靈、見なかつた？」

坐道が僕に訊ねた。

「あー……見たというか、アイツを殴りつけたといふか……」

「ヤツと交戦したのか？　君は何て危険な事を……！」

胸倉を掴みそな勢いで岩男さんは僕に詰め寄つた。

「す、すみません！　何と言うか、その……勢いで……」

思い返してみると、自殺行為に近い事をしたんだな僕は……。
「よくあの靈に攻撃できたね。リョウ」

「あ、前に坐道から貰った紙を握りしめて殴つたんだ」

「ああ……確かに、そんなのあげたね」

「うん。それでアイツを殴つたら、あっちの道に吹き飛んでいった」

僕は道の先を指差して言った。

「そうか。坐道、後を追おう」

岩男さんは僕を怒つた時とは別の、戦闘態勢に入

った時の怖い雰囲気を放ちながら、坐道に言った。

「わかった」

岩男さんの言葉に坐道は頷いた。

「リョウ君、君は今すぐ家に帰つて」

そう言い残して岩男さんと坐道は、アイツを追いかけるために走り出そうとした。

「ま、待つてください！」

そんな二人を僕は呼び止めた。

「僕も……一緒に行つてもいいですか？」

「……なぜ？」

岩男さんは短く訊ねた。

「アキホさんが消えたのは……多分、アイツのせいです。足手まといかもしれないけど、僕も……」

自分の気持ちが上手く言葉にできない。

「まあ、確かにリョウじや足手まといだよね」

坐道は平坦な声でそう言つた。

「……どうしても行きたいのかい？」

静かな声で岩男さんは僕に訊ねた。

「は、はい！」

僕の返事を聞いた岩男さんは、数秒考えると溜息を吐いてから言つた。

「リョウ君つて結構、私との約束を破るよね」

「す、すみません……」

「家に帰つたらお説教だからね」

「は、はい……」

「まつたく……それじやあ、行こうか。リョウ君」

「え？」

「君もヤツの事を追うのだろう？」

「は、はい！」

どうやら、僕が同行する事を岩男さんは認めたようだ。

「マジで？ 岩男」

坐道は岩男さんに訊ねた。

「帰れと言つてもリョウ君は勝手についてきそまだからね。それよりは、私たちと行動を共にした方が安全だ」

「なるほど」

岩男さんの考え方を聞いて坐道は頷いた。

「ただし、ヤツと戦闘になつたら私たちの後ろにいてくれよ？ リョウ君」

強い目つきで岩男さんは僕に言つた。

「分かりました」

「よし。それじゃあ……よいしょ
「うわっ！ 岩男さん、何を……！」

岩男さんは僕に近づくと、軽々と抱き上げた。これは、いわゆるお姫様抱っこというやつでは……つてあれ？ 似たような事を最近、体験したばかりのような……。

「その姿、似合つているよ。リョウ」

気のせいか、楽しそうな声で坐道は言つた。

「何を……って、この方が速くヤツに追いつけるからね」

抱き上げられた事によつて、岩男さんの顔がとても近い。

ああ、本当に岩男さんつて綺麗な顔だな……と、お姫様抱っこをされている恥ずかしさから、現実逃避気味に僕は思つた。

「岩男は、お姫様つていうより王子様だよね」

納得したように頷いて坐道は言つた。

「それって褒めているのか？」

眉根を寄せて岩男さんは坐道に訊ねた。

「需要はあるかも」

頷いて坐道は言つた。

「何の需要だ……さて」

はつ、と気合を入れるように息を吐いてから岩男さんは言つた。

「それじやあ行こうか」